年齢に関係なく、考えることは可能

当ＨＰ「プロジェリアの子どもからのメッセージ（バックナンバー随想等関係（Ⅲ）Ｐ、2004.12.19.：参照）」を見た若者から、【　アシュリーちゃんは、どうして、あんなに小さいのに、大きな気持ちを持っているのでしょうね。それだけ、辛い思いをし、そして、自分に、向き合ってきたからでしょうか。　】とのメール。

いつものように、厚かましく次のように返信した。
【　辛い思いは、人と比べれば質的、量的に異なれど、人それぞれ抱えていると思います。１３才の年齢でもアシュリーちゃんのように、人は日々「どう生きるか」に自ら向き合い考えることが可能ということでしょう。 言い換えれば、条件が異なれど、人は考えることは可能ということかなとも思います。我々はついつい、「今、考えるのは面倒。明日考えよう。」と甘んじているだけと思います。

今お手伝いしてる緩和ケアの問題でも、私には同じことのように思います。
余命幾ばくとがんを告知され、狼狽する人、「なぜ自分が？」という答えのないスピリチュアルな悩み、等々……。
もし、アシュリーちゃんのように大人になる前から、「人生はどう生きるかなんだ。長さは重要じゃない。」をテーマに日々過ごして来てれば、その狼狽、悩みも少しは少なくて済むかもしれませんね。日本の死亡原因の１／３ががんであり、第一位。私たちがそれぞれ向き合うことになる問題でもありますよね。
私が緩和ケアに今係わるのも、こうした人間の根源的な本質であろうことが、更により明瞭に見てこないかなぁという想いから。自らへの問いの答えを追い求めているということかな。
相変わらず、自己中心的かな？ でも、今の自らの命を輝かせようと考えないで、がんの方と緩和ケア“虹”の理念であるお互いの「命の輝き」のために「新しいコミュニケーションと社会創り」を共に語ることなんてできませんものね。だって、「福祉」とは、障害児問題、難病の方々のことだけでなく、全ての人の「福祉＝幸せ」を考えることでもありますものね。

アシュリーちゃんの「私がどれ程家族を愛しているか、伝えておきたい」というように、人と係わり合う中で、迷い、悩みながらも「どう生きるか」を自らに問い続けることが、正に「人生」であり、「今を生きる」ことかなと思っています。 】

（2004 年 12 月 20 日　記）